

第1回県立高等学校改革懇談会（石川）記録

- ・日 時 令和4年7月27日（水）14時00分～15時30分
- ・会 場 石川高等学校 会議室
- ・傍聴者 5名
- ・進 行
(1) 開会

(2) 県立高校改革監挨拶

本日は、石川町の塩田町長をはじめ、御出席の皆様には、改革懇談会の委員をお引き受けいただきまして、加えて、御多忙の中、御出席いただき、誠にありがとうございます。また、日頃、本県の教育政策の推進につきまして、御理解と御支援を賜っておりますこと、重ねて感謝申し上げます。福島県教育委員会では、急激な少子化の進行、あるいは社会環境の変化に対応しました、今後の県立高等学校の在り方につきまして、県学校教育審議会に諮問を行いまして、答申を頂きました。この答申の中で、「1学年3学級以下の小規模校が増えている」という課題が指摘されております。また一方で、「中山間地域における、地域との連携を含めた、高校教育の充実」も合わせて求められているところでございます。これを基に致しまして、福島県教育委員会の方では「県立高校改革基本計画」を策定いたしまして、その中で、高等学校に求められる、学びの在り方ですとか、地域における役割、そういったものを踏まえまして、各学校の位置付けですとか、特色を明確にしなが、魅力ある高等学校を作っていくこととともに、小規模校につきましては、「再編整備」を合わせて進めるということにしております。現在、前期の5年間の実施計画に基づいて、取り組んでいるところでありますが、今年1月には、昨年末、県教育委員会の方で公表いたしました「第7次総合教育計画」を踏まえまして、「県立高校改革後期実施計画」を策定いたしまして、後半5年間の実施方針を皆様にお示したというところでございます。この内、石川町におきましては、県立石川高校が、前身の学校から数えますと、来年100周年を迎えるという、非常に長い伝統校として、長く地域の皆様に支えられてまいりました。そして、各世代におきまして、この地域の核となる卒業生を輩出してきたと認識しております。これもひとえに、石川町の行政をはじめといたしまして、地域の皆様、同窓会、PTAなど、様々な方の御支援の賜物であると考えております。改めて感謝申し上げます。今回の実施計画におきまして、県立石川高校については「1学年1学級の高校」とお示ししておりますが、「地域協働推進校」として、地域との協働により、教育内容の充実を図り、生徒の進路希望を実現しながら、「地域の核として社会に貢献できる人づくりを担っていく学校」にしていく考えでございます。この後、県立高校改革に取り組むことになりました経緯、県立石川高校の現状、改革の方向性について説明していきますが、委員の皆様におかれましては、今後の県立石川高校の魅力の向上と、地域と関わりの深い魅力を持った学校として発展していきますように、忌憚のない御意見を賜りたいと考えております。本日は限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願い致します。

(3) 説明（担当）

(4) 懇談（進行：菅野改革監）

【塩田金次郎】(石川町長)

本日は、お招きをいただき、感謝申し上げます。今回の「高等学校改革後期計画」において、県立石川高校が存続されるということで、大変嬉しく思っている。改めて県側の決断に、感謝申し上げます。とりあえず、存続は決まったわけだが、私としては、これからが正念場であり、スタートではないかと思う。まさに、これから「山あり谷あり」の困難な道を進むことになるのではないかと感じている。県立石川高校は、10年前の入学生は100人、今は50人程度である。時代の流れとはいえ、この厳しい状況の中、我々は、県立石川高校を支えていかなければならないと考えている。そこで、今後県側をお願いしたいことは、普通科の高校を「時代のニーズ」や「時代の流れ」、そういうものを踏まえて、学科の改革をするべきではないかと考える。実は、25年前、私が県議会議員で、党の文教副会長を担っていた時、当時の高校課長さんと「学科編成をしなければならない」と意気投合し、今の光南高校、当時の矢吹高校の普通科を「総合学科」にしようとした。その時、周りは「そんなことをやっても、上手くいかないだろう」と批判していたが、私は党で、しっかり意見をまとめ、県の高校教育課を支えて、最終的に総合学科を設立した。

今回、この少子化の中、人口減少が加速して、令和20年度の頃になると、中学校の卒業生が、今の半分7,500人くらいになってしまう予測もある。我々は、いかに県立石川高校を、魅力ある学校にするかということが今後の課題である。私がお願いするのは「普通科ではない学科編成をすぐにやってもらいたい」ということである。どういう風にすれば良いかと言えば「普通科」ではなく、「キャリア実践科」「キャリア教育科」でも良いから、県立石川高校でしか学べない学科をつくり地域の皆さんに知ってもらい、生徒を募集していく。現実的には、少子化で、生徒を集めるのは大変だと思うが、県立石川高校にしかないような特色ある学科編成をお願いしたい。普通科では、駄目。これは、ずっと前から言っている。今日は、改革懇談会であり、そのようなことを言っても、お話にならないと思うが、一つ抜本的な学科編成をしてもらいたい。今、県立石川高校は「いしかわWORK & LIFE教育」ということで、キャリア教育の実践が、非常に高い評価を受けている。よって、この地域の皆さんは、県立石川高校に行けば、キャリア教育を受けて、将来、社会に出たときにそれが活かされるといった学科を考えていただきたい。よろしくお願いしたい。

【中野正人】(県立高校改革室長)

只今、学科の構成について「普通科ではなくて、特色ある新たな学科を考えてほしい」という御意見だったが、そういった、普通科の新たな流れというのは、文部科学省の方でも、新たに示されている状況ではある。只今、町長さんからの「特色が、外から見ても分かるような形のもの」については、今後、学校の先生方と十分に相談させていただきながら考えていきたい。一応、計画では、「1学年1学級」の中でも、子どもたちの進路希望に十分、答えられる汎用性の高い学科として、今回の計画では「普通科」を示している。

現在、県立石川高校は、普通科2学級規模で運営されているが、その中であって、4つのコースに分かれて、進学に対応した学びのグループ、キャリアグループ、技能向上グループと、各グループに分かれて授業を行っている。こういった先行事例を参考に普通科の中で、どのような形で特色化が進められるか、先生方と相談するとともに、今後、設置される予定の「学校運営協議会(コミュニティ・スクール)」の意見も頂きながら、特色や学びを設定して参りたい。

【小玉陽彦】(石川町教育長)

スライド説明にある「今後の県立石川高校の在り方について」、これが一番大事である。只今、町長から話にもあったが、県立石川高校を単なる普通科ではなく、文科省でも、学教法施行規則が一部改正され、学際科学的な学科や地域に関する学科など、そういった形でも

認めるということになったので、学科についての検討をお願いしたい。私の手元に文科省での普通科改革支援事業の第二次募集の要項がある。これに県立石川高校も応募して、今後、許可が取れるかどうかは分からないが、3年間の支援を受けて、普通科改革については、魅力化も含めて国の補助金を頂きながら、進めていけば良いのではないかと。今年度、全国で5校が採用されている。締め切りが8月15日となっており、まだ間に合う。校長先生におかれましては、お忙しいところ、大変だと思うが、県教育委員会を通して文科省に支援事業に応募してみてもどうか。積極的に高校を改革する、魅力化を図るということで、県教育委員会をあげて、国の方に要請していただきたい。石川町は「福島県立石川高等学校高校魅力化推進事業」を今年度立ち上げ、町でも支援しているので、県立高校の更なる魅力化を図るべく、検討していただきたい。

これと合わせて、後期実施計画について聞きたいことがある。資料には、県立石川高校は、新たに『1学年1学級規模』の本校とする、とある。それで、気になったのは「入学者数が募集定員の2分の1以下になるなど、教育の質の向上が著しく困難になる場合、あるいは、地元からの入学者の割合が著しく低い場合には、存続について検討します」という文言である。以前、小野高校平田校（分校）が1学年1学級で、もし、入学者数が3年連続で、定員の半分以下であれば、廃校するという決まり（※分校の生徒募集停止の基準）があったが、これについて、石川高校には「3年連続」という文言はないので、3年ないし4年続けて、定数の40人の半分、19人以下になれば、存続について検討するというところでよろしいのか。あと、もう一つ、後期実施計画（p.11）「高等学校における特別支援教育の推進」の中には特別支援教育コーディネーターの任命、さらには通級教室の充実ということが書かれているが、福島県内の県立高校で「通級教室」を設置している学校はあるのか。

【中野正人】（県立高校改革室長）

まず、文部科学省の方で、普通科の新たな在り方の支援事業にチャレンジすることについては、国の補助制度があることは承知している。それについては、令和6年度から1学級となる学校が、その事業にどのように該当していくのか整理しながら、今後の検討の材料とさせていただきたい。

御質問の「1学級の存続について」だが、後期実施計画（p.14）に記載があるとおおり、定員の半分以下になった場合は、生徒が選ばないという状況であり、その場所に学校があることに必要性がなくなってきたと判断できる。その場合には、存続について検討せざるを得ないと考えます。

また、「1学級本校化」には、「地元から入学している生徒の割合が著しく高い」という基準がある。つまり「その地域から、その高校がなくなってしまうと、その地域に住んでいる多くの子どもが通学するのに困ってしまう」ということで、それが存続の要件になってくると考え、検討し結論を出した。今後、こういった状況が変わってきた場合には、存続の必要性を再考しなければならないと思っている。それで「何年続けば、終わりになる」という点については、ここに記載していないとおおり状況を見ながら検討するというところで、その点はご了承願う。また後期実施計画（p.11）「特別支援教育の推進」というところで、「通級指導」については、これまで高等学校の中では、取り組んでいなかったところである。しかし、昨今、様々な課題を抱えながらも、特別支援学校ではなく、普通の県立高校の方に入学する子もいる。そうした生徒のためにも、「通級指導」をやる必要があるだろうということで取組を始めている。実施している学校は、勿来高校（H30）、本宮高校（R3）、修明高校（R4）である。

【岡部弘幸】(地元有識者)

令和6年度から募集定員が40人になるわけだが、今後、受験する世代の人口の推移を見ると、定員40人では石川高校に入りたくても入れない生徒が出てくることも考えられる。石川町には、県立石川高校と私立の学法石川高校の2校があり、県の郡部においては、特殊な学校の配置になっている。県立石川高校には「ワーク&ライフ教育」があるので、学びたいことがあるとか、質の高い教育を求める生徒さんが集まってきている。加えて、県立石川高校は、石川から郡山・須賀川方面の学校に経済的事情で通えない子のための「セーフティーネット」の役割も果たしている。そういった中で「定員40人」となれば、県立石川高校に行きたくても行けない生徒が出てくるのではないかと心配している。その点を県はどのように考えているのか伺いたい。

【中野正人】(県立高校改革室長)

確かに、子どもの数だけで考えれば、そうなることも考えられる。しかし、子どもの志願動向を見ると、この地域だけではなく、郡山方面など他の地域の学校、あるいは私立の学校を選択する人もいる。そういった、子どもの数の減り方だけではなく、志願動向を考えれば、2学級規模での維持は難しいと考えたところであり、(改革基本計画の基本方針から)1学級本校ということで策定した。1学級になったとしても、子どもたちが主体的に選んでくれるような魅力ある学校づくりを進めていく。そのためには、地域の皆様の御協力が必要となる。

【渡辺実】(地元有識者)

1学級となると、現実には厳しいと考える。定員40人では、(心配な生徒は)受験を避け、他の学校を選択することになり、入学者が40人をオーバーすることはない。さらに教員数も減り、1学級になると先生も大変になる。少子化の中で、県立のみが定員を減らしており、私立は維持又は増やしている状況もある。

地域の特性でいうと、石川は鉱物の産地である(3大鉱物産地)。そういう地域の特性を生かした学科を考えてはどうか。1学級ではどうにもできないが、2学級であれば特色のある学科もでき、全国から人も集まる学科となるのではないかと。福島県全体が、少子化の中で、どうにもならなくなってきた状況は理解している。要望ですから、よろしく願いしたい。

【中野正人】(県立高校改革室長)

御要望は、重く受け止めさせていただいた上で、「1学級にすれば、入学者が定員の40人を割り込んでくるのではないかと」ということについて、そのような状況にならないよう、中学生や保護者の方に説明する場を設けて学校の魅力を発信し、その上で御理解いただき、県立石川高校を選択していただけるよう、魅力化を図って参る考えである。

【富岡信】(石川中学校長)

まず、県立石川高校の存続が決まってほっとしている。令和6年度からの1学級は決まっていることであるが、石川町では、中学校の生徒数が増加傾向にある。石川中学校の2年生は、今の高校1年生の学年と比べて30人以上多い。石川郡全体でも、中学校の生徒数が増えている状況である。定員を40人にする時期を先延ばしすることはできないか。現在、三者面談をやっているが、中学校3年生で県立石川高校を希望している生徒は多い状況である。

【中野正人】(県立高校改革室長)

これまでの説明のとおり、令和6年度から「1学年1学級」とする計画である。そこで、

「地域の子どもの減り具合において、一時的に増加したり、増減がない状態になったりする可能性もあり、そうなった場合の対応方法を考えてもらいたい」とのことだが、原則、これまでの子どもの減り具合、入学の状況、そして地域の子どもたちの進路選択の動向などを鑑みた結果、令和6年度から実施する計画を示した。これについては御理解をいただきたい。加えて、今後の石川高校の魅力化、特色化を図るために、皆様の御協力を賜りたい。

【塩田金次郎】(石川町長)

令和6年度から、1学級40人を実施することについては、承知している。仮に、今後、志願者が増加して60人以上になった場合でも、定員40人は変わらないのか。

【中野正人】(県立高校改革室長)

県立高校というのは、募集定員を策定して生徒の募集を行っている。その中で、募集定員より希望される生徒が多くなるタイミングはある。ただ現行の入試制度は、前期・後期に分かれており、前期入試で合格圏内に入れなかった子は、後期入試で定員の空いている学校を選択して、入学を目指してもらおう形になっている。募集定員以上が希望していたとしても、合格者の枠を広げるというのは難しい。

【関根裕樹】(石川高校PTA会長)

保護者の立場として、部活動を考えると、1学級40人となった場合は、個人競技のみの部活動となってしまうのではないかと。そのため、他の地区にいてしまう子どもたちもいるのではないかと。部活動についてはどう考えるのか。また、現在、地域からいろいろ協力していただいていることもあるが、どうなるか心配である。

【中野正人】(県立高校改革室長)

「部活動について、どのように考えているのか」ということであるが、1学級となると、当然、生徒の数も少なくなり、先生の数も減る。学校の教員の配置については、標準法という法律で決められており、学級数ではなくて学校全体の収容定員数(1年生から3年生までの収容定員数)で、教員の配置の数が決まる。少なくなるのは間違いない。その中で、学校側が「こういった学びを行いたい。そのためには、これだけの授業数が必要で、これだけの教員数が必要になってくる。法律的に、教員数は決まっているが、プラスアルファの人材がないと成り立たない。」となれば、人事担当者とは話し合った上で、学びの内容に応じて適切に対応していくことになっている。

それから、「子どもたちが他の地区に行ってしまうと、地域からいろいろ協力していただいていること、また周辺地域からの免許取得の際(の配慮)は、どうなってしまうのか」という件については、県立石川高校を地域協働推進校に位置付け、さらに学校運営協議会(コミュニティ・スクール)を設立することで、地域の方々も学校運営に携わって頂き、学校での教育活動、地域の中での教育活動、そして学校と地域が一緒になって行う教育活動、そういった活動の場で、より魅力ある教育活動ができるようになるのではないかと考えている。

【緑川喜輝】(石川中学校PTA会長)

まず、1学級40人と決まっているわけだが、今後、キャリア教育や、さまざま政策などにより志願者数が増加してきたら、募集定員も増やすことはあるのか。また、石川町には、県立と私立の2校の高校がある。町の商店街は、高校生が存在によって支えられているといってもいい地域である。今後、高校生の募集定員を減らすことによって、町全体の活性化が鈍ってしまうのではないかと懸念している。その点をどのように考えているのか。

【中野正人】(県立高校改革室長)

まず1点目、「学校の取り組みが功を奏して、志願者が増加し、前期入試の段階で倍率が1.5倍程度の高い倍率になった場合、募集定員を増やすことはあるのか」という主旨の質問については、そのような状況になった場合、生徒の志願動向を見ながら、募集定員を考えていくことになる。次に2点目、「高校生の人数を減らすことによって、地域の活性化が鈍るのではないか」という質問については、子どもたちに支えられている地域という言葉は、大変ありがたい。従来から、石川高校の生徒は、「いしかわワーク&ライフ教育」という取組により、地域の中で育てられている。さらに、今後、全ての高校では「地域探究活動」という取り組みを実施する予定である。これは、地域を知り、地域課題を見つけ、その課題に対して、どのような解決策があるのかを探究するという学びである。石川高校においても、この取組を実践し、子どもたちには地域の当事者意識を持ってもらい、地域を支える人材となるよう育ててもらいたいと考えている。

【熊井トシエ】(石川高校同窓会長)

県立石川高校は、来年、100周年を迎える。その準備をしている者としても、来年、元気に100周年を迎えるのか。それとも、学校が閉じてしまう中で迎えるのか。町民の皆さんと、どきどきしながら結果を待っていた。そのような中、存続が決まり、ほっとしている。ただ「40人」という数字は懸念される。これまで町長や教育長が、「県立高校を選んでもらえないか」ということで、校長先生が学校説明会に行ったり、石川中学校出前講座を開いたり、こつこつやってきた。そこで「40人」という数字が出たとき、「もしかしたら、県立高校に入れないうちの子もさんが出るのではないかと、みんな頭を抱えた状態になった。最近の県立石川高校は「いしかわワーク&ライフ教育」などの活動により、町の皆さんから、県立石川高校の生徒は頑張っているという声が聞こえるようになってきた。加えて、硬式野球部も県予選の1回戦を突破して、みんなで喜びを分かち合った。石川高校の先生方は授業の合間を縫って、キャリア実習に行っている生徒さんを見に行くなど、たくさんの仕事をこなしている。そのような状況の中で、本日の改革室からの説明は「普通科の中で、あれこれ、いろいろな仕事をやってもらいたい」という感じに聞こえて、今後、1学級40人になれば、先生の数が減ってしまい、それらの仕事をこなすことができるだろうか心配している。その点を考慮していただきたい。

【菅野崇】(県立高校改革監)

40人という限られた規模の中で、「魅力化、魅力化」と言って、たくさん、仕事を詰め込むことになるのではないかと御指摘ですが、私たちも「あれも、これも」という盛り込み方ではなく、「石川高校における魅力というものを、しっかりと捉えて、それをしっかりと磨き込んでいく」という作業が大事と考えている。先程からも地域との関わり、地域の魅力といったものとの関係性が大切という御指摘もあった。そういったところに焦点を当てて、この学校の魅力を磨いて、そして、ここで学ぶことの意味を感じることができる学校にしていきたいと考えている。そういった意味で「キャリア実習」という話も出てきた。さらに「子どもが、この地域を元気にしている」という意見もあった。そこで、実際に、子どもたちと接した上での、石川高校に対する考えや期待などあれば、お聞かせ願いたい。

【溝井睦美】(地元有識者)

地元の一企業(猫啼温泉 井筒屋)として、魅力ある学校づくりに携わることや、今後のコミュニティ・スクールに関して何らかの協力できることがあれば、手助けしていきたいと思っている。学校が残ることに関して、私は宿泊業を行っているが、お客様の中には「私は、県立石川高校を卒業した。県石前の桜が、とても綺麗だった」などといった話をして、石川

町を懐かしく思いながら、戻って来てくれる人がいる。そういった意味でも、学校が残ることは、すごく大事なことだと思っている。今後、魅力ある学校づくりに関し、企業として何か携わることができるのであれば、協力したい。

【菅野崇】(県立高校改革監)

本日、改革懇談会という形で、皆様から広く御意見を頂いた。それで、この先の作業としては、「魅力化をどのように図るか。そして、それを実現するためには、何が必要なのか」ということを磨き上げていくという場面が出てくる。その際は、御意見を頂きたい。

【鹿岡みや子】(地元有識者)

人口減少の中、40人で魅力ある学校づくりが可能なのか不安である。限られた中で、学科を何に絞ったらよいか。先程、石川の鉱物などの意見があった。鉱物や地学なども含めて、新たな科目を取り入れてはどうか。

【中野正人】(県立高校改革室長)

今程、伺った話も、今後、学校のつくりを考えていく中では、非常に参考になる御意見である。鉱物や地学という一つの地域の特色、特徴を生かした学びというものを、学校の特色に加えるような形、それを科目という形で置いてみてはどうかという話だが、こういったことについても、「1学年1学級」という中で、どういう形でカリキュラムに加えていけるか検討していかなければならないと考えている。

【菅野崇】(県立高校改革監)

本日は、長時間にわたり、活発な御意見を頂き、感謝申し上げます。

今回、「県立石川高校は、『1学級本校化』という形で存続する」という方針をお示した。これについて、皆様からは、規模が小さくなるけれども、一定の御理解を頂けたと、私どもは、受け止めた。本日の御意見の中にもあったが、やはり「40人」という限られた人数で、「どのように特色というものを磨いていくのか、あるいは、それを出せるのか」といったところが、これからの重要な検討課題であると考えている。おかげさまで、町行政の御支援を頂いており、先程から話があったとおり、「県立石川高校は元気が出てきて、良くなっている」という評価を得ている。その流れを今後も継続できるように、魅力ある学校にしていきたいと考えている。

令和6年度から「1学級本校化」の実施ということで、時間は限られている。今後は、皆様から頂いた貴重な御意見を基に、より良い教育環境整備に向け、具体的な検討に着手していくことになる。県立石川高校の在校生、これから県立石川高校を志願する中学生、それぞれが不安にならないよう、丁寧な説明と情報発信に努めて参りたい。

今回の県立高校改革懇談会は、私どもにとって、非常に建設的で有意義な会であった。懇談会委員の皆様には、改めて感謝申し上げます。県立石川高校の「1学級本校化」に関する改革懇談会ということで、本日、進めてきたが、以上で、県立石川学校に関する懇談会は終了させていただきたい。本日は、誠にありがとうございました。

(5) 閉会